

267) 春よ来い

湖に漕ぎ出す船は	霧のなか静に消えて
ひ 曳き波の波紋はやがて	さざなみ うみ 漣波の湖へかえった
風寒き湖北の村に	秋はゆき空は時雨れて
人々は雪に埋もれ	しばらくは暮らしを閉ざす
あの男 ^{ひと} は湖を渡って	賑やかな都会に移り
暖かき春が来るまで	この村に戻って来ない
哀しみを湖に浮かべて	ただひとり泣いてみようか
北風よ伝えてほしい	この心愛 ^{いと} しい男へ
山桜ひとつ開けば	春 ^ひ の陽は山を登って
懐かしいあの愛の日は	よみがえる昨日のように
あの男は花と一緒に	この村に必ず還 ^{かえ} る
新しい春の予感に	新しい希望が走る
あの男が漕いでくる舟	倖せを積んでくる舟
夢のなか花は乱れて	目くるめく季節 ^{とき} は過ぎてく
耳もとで囁 ^{ささや} くことば	聞きながら眠りつきたい
春よ来い湖をわたって	春よ来い湖北の村へ
春よ来い湖をわたって	春よ来い湖北の村へ
新しい春の予感に	新しい希望が走る